

然るに現今の信徒の中に、斯の如く清い信仰の所有者が何人あるか。多くは金の力を以つて大壇越と稱し自分の淺薄の智識を以て、少しく教義を研究すれば増上慢に陥り、僧侶を批判し、欠點を探し出し、天晴大學者となりすまして居る者が澤山ある。甚たしい者は經文讀誦の音聲、節廻し迄を云々せんとする者さへある。是等の人々は誦經を以つて浪花節と心得、或は先祖の廻向を以つて寺院との交際術と考へて居るのである。

自分は殊に宗祖棲神の法窟たる延山近傍に、此の傾向の甚だしいのを歎かざるを得ない。身延の村民にして、月に一回祖師堂に參拜する者が何人あるか。八十余歳の法主猊下が、四方御親教の御發錫、及び御歸山を送迎する者が何人あるか。彼等は或は庭に立つて互に私語しつゝ、眺め、間違つて低頭禮拜する者さへ極めて稀ではないか。宗祖大士が「縦ひ何處にて死に候とも未來際迄も心は身延山に棲むべく候。」と宣ひ、「日蓮が弟子檀那等は此の山を本として參るべし。」と御遺言あらせられたからには、身延を以つて信仰の中心としなくてはならない。身延こそ眞の常寂光の都たるべきである。然らば常寂光土建設に要する最大急務は何か？法貴しと雖も自然には弘まらない。如何にしても完全なる能弘の師が必要である。「人貴^キ故^ニ處貴^シ」とは此の事である。斯くの如く考へ來た時に、自分は完全なる能化輩出即教學の勃興を叫ばざるを得ない。ある人現在の延山を評して

「杉の栽培も結構である。けれ共人物の殖栽は一層大切である。」と



聖日蓮之奮闘

間宮觀應

渺茫たる海洋崢嶸たる峰巒、偉大なる自然を背影として七百年已前東條安房の一角に旃陀羅が子とし孤々

の聲を擧げし聖日蓮は吾等が常に忘れる事の出来ない最も猛烈な最も意義ある清い奮闘の軌範者であつた。彼の奮闘は西洋に於けるルーテル以上の宗教革命の献身的奮闘であつた。彼が此の奮闘を開始するまでに宗教に對する多くの疑問もあつた煩悶も有た。然し其の疑問の結果其の煩悶の結果勇敢なる宗教革命の運動は開始されたのである。

彼は十二歳の時より清澄の雄利に於て經教卷に目を曝らし清澄に在る一切の書籍を讀破した。時に聰明なる彼の胸裏にはムラ／＼と一疑は生じた彼は突如として叫んだ。

現今八宗十宗有りて互に權實を爭ふと雖も釋尊の本意は定で一なるべし何れが是れ眞佛教なるや。

自ら問て又自ら解んとし默然沈思する事數刻然し彼は遂に妙解を得る事が出来なかつた。彼は彼の力の及ばざるを知り師の教を請はんとした。

依法不依人、依義不依語、依智不依識、依了義經不依不了義經、とは槃涅經に説く四依弘經の法にて候。然るに各宗同じからず華嚴宗は華嚴經に依り天台宗は法華經に依り念佛宗は阿彌陀經に依り眞言宗は大日經に依て立てられて候。此の中釋尊の眞意に適ふものは熟れにて候か。

師道善法印は學德兼備の高僧であつた。然し彼の此の質問には答へ得る事が出来なかつた。

師に問へども答へず。彼は佛教に對する疑問はより以上深く煩悶は更に煩悶を重ね夜の目も閉じられぬ様になつた。彼の佛教に對する疑問と煩悶は抑へんとして抑へがたく問ふに師なく語に友無く學ぶに書なき片輒の一寺では満足出来ない。彼が遊學の心は愈々抑へ難くなつて來た。而して目指す所は先づ新氣運の動きつゝある覇府鎌倉であつた。

四年の鎌倉遊學五年の叡山遊學及び園城寺、高野、天王寺、等の諸寺歴訪苦學遊學十數年其のかい有つて遂に彼は八宗十宗中何れが眞佛教であるかを定め得、兼て見込を着け來てた法華一乘釋尊一佛主義は愈々明確となり此の中心主義に照して見る時は諸宗各々釋尊の眞意にあらざる事は瞭然となり法華經に對する信念は愈々堅きを加へる様になつた。「法華經第一」是十數年の發奮靜思攷究修行の結果として生じ來た大主張で

あつた。彼の主義は決した。主張は定まつた。そして是を萬天下に向て發表する成算も漸く熟して來た。而し此の時に於て彼の胸中にはまたもや苦悶が生じてきた。

今自分は一切經の勝劣八宗十宗の正邪は辨た。而し今公然と世間に發表したならば三類の強敵の競い起る事は掌中の玉を見るよりも明白な事である。もしも是を言はなかつたならば釋尊の身命を喪ふとも教を匿さざれこの諫曉を用ひぬ者となり無慈悲の者と終らねばならん。如何になすべきか日蓮が身體はこゝに極まれり。(報恩抄取意)

彼は手を又み冥目しそして熟思した。時に彼の胸中に浮び來たつたのは法華經の文であつた。

如來現在猶多_レ怨嫉_二況滅度後云云又曰_レ一切世間多_レ怨難_レ信云云又曰_レ我不_レ愛_二身命_一但惜_二無上道_一云云又曰_レ不_レ自惜_二身命_一云云涅槃經に曰_レ不_レ惜_二身命_一云云

今度自分が身命を惜んだならば何時の世にか救世の大願を全う出來様か世間より怨嫉されるに依て初めて自分は法華經の行者としての價值があるのである。人事を盡して天命を待つ命を的として法華弘通をしたならば必ずや釋尊の大理想廣宣流布の大願は實現する事ならん。

數刻にして彼は兩眼を見開た。その目は希望と決心との光に充ち満ちていた。彼の満面は歡喜の色が漲っていた。たとへ胸をばひしほこを持ってつき足にはほだしをうちきりをもつてもむごも命の通はん程はよも南無妙法蓮華經の御題目は捨てない。かゝる大決心は彼の胸裏に深く深く刻まれた。斯の如き献身的な大決心大覺悟の前には『わすかの小島の主のおごさんにをそれては閻魔王の責をば如何にすべき』と呼號され刀杖瓦石の難、遠離於塔寺の難、數々見濱出の難、有りとあらゆる迫害は風前の燈の如きものであつた。

此處に始めて彼の意志は決定し權實二教の戰端をば清燈の一堂に於て開た怨嫉多難の佛の豫言は的中し遠離於塔寺の難を始めとし或は燒打の難或は龍の口或は佐度四箇度の大難無量の小難襲ひ來れば來る程彼は勇氣百倍また百倍奮闘に奮闘を重ね獅子王の如き勇猛心のもとに突進した。彼の一生は奮闘の歴史であつた。彼は奮闘の勝利者であつた。

聖人滅後六百五十年の今日に於て旭の昇るが如き勢をもつて益々その精神を發揮し來り時代の進化と共に彌々社會より歡迎を受けその向ふ所滔々として流れ今や聖日蓮の偉なる人格は廣遠にして且つ玄妙なる教義に乗じて世界到る處に君臨せんとするに到りしは一に彼の献身的奮闘と犠牲的努力との然らしむる所である。

吾人等はいる堅忍不拔の勇者の末輩である。『日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず』『佛法を學し謗法の者をせめずして徒らに遊戲雜談のみして明し暮さんは法師の衣を着けたる畜生なり』と訓誡叱咤され三陣續けよかしと我等弟子等を策勵されたる御聖訓を體得して大いに現代社會の惡思潮と戦ひ日蓮主義の顯揚に盡力せん。

聖訓

鏡に向つて禮拜をなす時、浮べる影、又た我を禮拜するなり。(御義口傳)

信心の血脈なくんば、法華經を持つとも無益なりと。(生死一大事血脈鈔)

藏の財よりも身の寶勝れたり、身の寶より心の寶第一なり。(峽峻天皇御書)

一語をなめて大海のしほをしり、一華ををして春をすいせよ。(開目鈔)

俗間の經書治世語言資生の業等を説かんと、皆正法に順せん。(一代大意鈔)

師々王の如くなる心をもてる者、必ず佛になるべし、例せば日蓮が如し。(佐渡御書)